



日本文学全集 12



武者小路実篤

真理先生

若き日の思い出 他



河出書房

日本文学全集 12 武者小路実篤



© 1969

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和44年1月20日 初版発行
昭和49年5月20日 7版発行

著者 武者小路実篤
発行 者 中島隆之
印刷 者 草刈龍平
装 幀 原 弘

印刷・中央精版印刷株式会社

製本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京(292) 大代表 3711

振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバー・帯にあります

目次

真理先生……………三

若き日の思い出……………一五

我等は如何に生くべきか……………二九

友情の歴史……………三二

マチス・ルオー・ドラン・ピカソ訪問記……………四七

年譜……………中川孝三

文学入門……………瀬沼茂樹三三

作家の横顔……………中川孝三

真理先生

一

これも山谷五兵衛の話。

僕は最近真理先生を知った。真理先生という人がいることは僕は友達からずいぶん前から知らされていた。しかし僕は食わず嫌いで、逢いたいとは思わなかった。どうも虫が好かなかった。誇大妄想狂のようにも思われたし、偽善者のようにも思われたし、道学者の出来損いのようにも思われた。いつも真理真理と言って真理を知っているのは自分だけだという顔をしているように思われた。

ところがあつて見ると、ごく真面目な男にはちがいないが、噂に聞いて想像したのとはまるで違って、真剣な所のある男だ。僕のことだから相手がどの位、学問があるかないかは知らないが、ともかく僕の逢った多くの優れた人間の内でも、一番精神力の強い男だということは一目でわかった。これでは多くの人に尊敬されるのも当然と思った。身体は大きくない。体力は強いとは言えな

い。しかしへんに精神力を感じさせる顔だ。齡は六十を越しているだろう。僕は日本人がいけないとよく人から聞かされもし、自分でも言っているが、もしかしたら、真理先生は、大物ではないかと思う。もしかしたらである。僕にはまだはつきりしたことは言えない。

この真理先生は独身で、生活の方のことは全部弟子が世話をしている。男の弟子や女の弟子が入れ代わり世話をしている。午前は先生から呼ばれた人だけが逢いにゆく。その他の人には逢わないことにしたいきめられている。午後になると、いろいろの人が訪ねてゆく。そして先生にいろいろの質問をする。その質問に対して、そばで見ても気持のいいようにびたりびたりと返事してゆく。先生自身はなんにもかかない。しかし先生の語った言葉は弟子達が書いているらしいが、まだ一つも本にはなっていない。

その答えぶりを一つ紹介してみよう。

「人を殺すことはどんな時でもよくないのですか」

「あなたが殺されていい時がありますか。あなたが殺されていい条件があれば、それを聞かしてください。あなたがどんな時でも殺されるのがいやなら、少なくともあなたは人殺しをしてはいけない」

「私を殺しに来た人はどうですか」

「その時にならないとわかりませんが、人を殺すものは

自分が殺されてもいいということを証明している人間です。その時なら殺してもいいでしょう。しかしおそれなく、人殺しするものは、もっと簡単な動機で無考に人を殺すのでしょうか。つまり反省する力がないのです。

教育されてない野蛮人なのです。だから教えることが必要になるのです。他人を殺すものは自分を殺す権利を他人の手に与える者だ。自分が殺されたくないものは他人を殺してはならない。自分が殺されたい人だけが、他人を殺していい人だ。しかしそんな人は他人を殺すようなめんどろをするよりは、まず自己が殺されるがいい」

そう言う時、彼の心から火花が出るように感じられ、そばで聞いていてびりっとする。

彼は決してむずかしいことは言わない。しかし僕には反対できないことを言う。

ある人が、「先生の考えは実に平凡だ」と言った。すると真理先生はすまして言った。

「ありがとう」

その一言を聞いた時、びりっと胸に來た。

「僕はあたりまいのことときり言いたくない。今の人はあたりまいのことを知らなすぎる。何でも一つひねくらなと承知しない。糸巻から糸を出すようにしゃべるのは我慢ができない。わざと糸をこんがらかして、その糸をはどく競争をしているようなものだ。あたりまいでな

いことをもっともらしく言う、わけがわからないので感心する。こういう人間が今は多すぎる。僕はそんなめんどろなことをする興味は持っていない」

二

僕はある時天皇についてどうお考えになりますと聞いたら、

「愛している。おしたい申している。これは母の血だ。理窟ではない」

と言った。またある時こう言った。

「日本全体のため、先の先まで考えることのできない人が多すぎる。あとは野となれ山となれと言う人が多い。碁打で言う、一手先か二手先きりわからないで、偉そうな顔をしてものを言う無責任者には時々腹が立つよ。日本人はもっと頭の根気をよくしなければならぬ。一を知って二を知らない人間が、もっともらしい顔して大いにしゃべる。それが民主的だと思っている人が多い。もっと自分の言行には徹底した責任が持てるよう、よく考えぬく習慣が必要だ」

ある時、僕はこう言った。

「あなたは真理を愛するとおっしゃっているそうですが、真理ってそんなにたよになるものですか」

「真理以外にたよになるものがありますか」

僕はそうとなりつけられた。

「真理以外にたよになるものはない。人間は皆死ぬものだ。暴力は誰でも殺し得るものだ。だが真理は殺されない。最後の勝利は真理が得る。キリストは神の子だから僕は尊敬するのではない。またキリストが十字架を荷ったから尊敬するのではない。真理以外のことを言わなかったから尊敬するのだ。真理だけが死なない。また僕は心から頭をさげるのは真理だけだ」

「愛とか美とかはどうなのですか」

「愛と美も真理に背かない時、限りなく美しい。真理にそむけば、その愛と美を僕は讃美できない。しかし愛と美に真理以上のものがあることを僕は認める。それ以上、愛と美を真心を持って愛することが、真理だと言える。真理は、人類全体が天国に入れる道を示すものにはかならないのです」

僕には真理先生の言うことがどこまでほんとうか知らないが、反対する気がせず、聞いていると、なんとなく明るい気になるのだ。

僕はある時真理先生に、馬鹿一の話をした。すると真理先生は、大いに興味を持ってぜひ見に行きたいと言うのだ。

それで僕は大いに興味を持って真理先生を馬鹿一の所につれていった。

三

馬鹿一に真理先生が君の画を見たいと言うのでつれて来たと言ったら大喜びで画を出して見せた。真理先生もはじめはあまりに幼稚な画で驚いたらしいが、熱心に見た。長い沈黙のあとで、

「感心しました」と言った。馬鹿一はそれまで黙って神妙にしていたが、そう言われると飛び上がるように喜んで言った。

「ほんとうですか」

「ほんとうです。僕には画のことはわかりませんが、僕は今までにこんなに誠実無比な画を見たことはありません。実によく見てかいてある。しかも実に愛してかいてある。それ以上実に尊敬してかいてある。誰もこういう雑草や石をこんなに愛することはできないでしょう」

すると馬鹿一は、

「ありがとう。ありがとう」と言って泣きだした。

そして今までかいた何百枚という、石や雑草を書いた画を持ち出して来た。

これにはさすがの真理先生も閉口したと思った。「よくもかいたものですね」

真理先生は微笑をうかべてそれをていねいに見だしたが、三四十枚見たらさすがに参ったらしく、

「もう見るのがくたびれました。今度またゆっくり見せていただきます。人が来て待っていますから、今日はこれで失礼します。だが実に感心しました。今の日本にあなたのような人がいると思うと、うれしくなります」

真理先生はそう言った。帰りに真理先生は言った。

「驚いたね。聞きしに優るとい言葉がおのずと浮かんで来る。日本も小さい国だが、知れば知るほどおもしろい人がいるね」

「先生はほんとうに馬鹿一の画に感心なされたのですか」

「感心しました。僕は画のことはわかりませんが、あの本気さと、石や草を神のつくったもののように尊敬してかいているのに感心しました。あの画なら僕の室にもかけておきたいと思いました。それにあの真剣さと、勉強はどうです。それに実に正直によく見えています。感心しないわけにはゆきません。たしかに少し変な所がありますが、僕は喜んであの男には頭を下げますよ」

「一つ画をもらってあげましょうか」

さすがの真理先生もすぐれとは言わなかった。

「くれと言ったら、どしどしくれそうですね。一つか二つなら喜んでもらいますが、それ以上は僕はほしくないのです。僕はあの世界に自分が入り込もうと思いませんからね。それに粗末にしてはわるいから」

「ほんとうにうっかりほめたら、後がたいへんです。どんどんくれますよ」

二人は笑った。

「だが日本にもなかなかいい人がいることを、おかげで知った。うれしく思いましたよ」

四

僕は真理先生が好きになった。それで午後によくよく出かけた。行けば何か教わるような思った。また彼の所に入出入りする人間は、実に善良な人ばかりで、誰にも好意が持てた。もちろんこの世ではあまり成功しそうな人が多かった。

ある日真理先生にある人が聞いた。

「朝に道を聞いて夕に死すとも可なりという言葉がありますが、先生はいつ死んでもいいとお思いですか」

「滅相もない。僕は道を行なっているものではない。僕は死ぬのは怖いですよ。少なくとも死ぬのはまだ嫌いです。だから僕はどんな理由があっても人を殺すことには賛成できないし、人殺しの話は実に嫌いです。僕が耶穌や、釈迦を限りなく愛するのも、手が少しも赤くならないからです。孔子の手には一滴位赤い血がついている。私は孔子は自己完成については人類第一の先生と思って実に尊敬していますが、その点で耶穌や釈迦の方になお

神聖さを感じます。僕はまた人殺しは実に嫌いです。殺された人間は気の毒すぎます。僕自身人殺しになるより、人に殺される方を選びたいと思っているのですが、殺されるのは実に嫌いです。僕はどうしても死ななければならぬ時は、あきらめて見せるつもりです、あてにはなりません。ずいぶん臆病な人でもりっぱに死んでゆくのですから、僕もりっぱに死んで見せたいと思っています。しかしできたら生きられるだけ生きて、ますます真理を知りたい。ますます賢くなりたいと思います。だから僕は自殺者には賛成できないのです。自分を賢くすることに不熱心なことは賞めるわけにはゆきませんからね」

「なぜ人間は死ぬのです」

「なぜ人間は生まれなければならないのか、僕にはわかりません。この地上に人間が生まれた事実は認めないわけにはゆかない。奇蹟を信じない限り人間は生まれるべくして生まれた者だということとはわかっています。しかし人間が生まれたらどうなるのですか。僕にはわからない。しかし僕には人類が完成に向かって進んでいること、いつか人間はすべて人間として生きなければおさまりのつかないことを信じています。そこに人類の意志がある。そして人類の完成のためには、一人の人間がいつまでも生きているよりは、いろいろの人が死んだり、生

まれたりする方がいい。自分が地上でなすべきことをした人は、もう休息していいことになる。休息が死です。だからこの世で生きられるだけ生き、するだけのことをした人は安心して死ねるのが自然だと思う。多くの人はこの世でしなければならぬことをしないうちに死ぬ。だから死を割り切れないものに感じるのです。するだけのことをしたものとって死は完成です。僕はこういう死を願って、働いているわけです」

「他人のために犠牲になることはいいことですか」

「犠牲を僕は奨励したくない。しかし自己を犠牲にすることで、人類の完成になお役立てば、その自己犠牲は輝くものになるはずです。他人を犠牲にすることは、それに反して実はいやな話です。僕はそういう話を聞くと、憤りを感じないわけにはゆかない。それがゴマメの歯ざしりにすぎないでしょうが、腹が立ちます」

「戦争はなぜやまないのです」

「人間の内に野蠻さがまだぬけきらないからです。人肉を食うということは野蠻であることは誰もわかっています。しかし人を殺すことの野蠻さはまだ誰もほんとうには知っていません。ごく少数の例外の人をのぞいては、戦争の種を自分の内に持っているのです。憎悪の念を内に燃やす者は、その種を内に持っているものです」

「敵を愛せよという言葉は真理ですか」

「真理です。敵も人間です。人間を愛することが真理です。この真理を知らないものは、戦争の種を自分の内に持っているものです」

「戦わないと殺されるという場合はどうすればいいのです」

「僕もそれには答えられない。殺されなさいと言えない。困ったものです。一番困った問題で、戦争が地上からなくならない一番やっかいな原因はそこにあるのかも知れません。自分が死なないときまれば戦争に参加するものは、ずっとへるのは事実と思います。人間は殺されるものだという事実は、一番やっかいな事実です。僕はそれについてなんにも言う資格のないものです。だから僕は真理に遠い人間なのです。しかしだからますます真理に憧れ、真理にますます頭をさげるのです。いつかは真理のために死ぬる人間になりたいとは思っています。しかしなれるとも思っていないんです」

五

ある日僕が真理先生を訪ねると、四十位の女の人が来ていて、硯の墨をすっていた。この人が例の人なのだと僕はすぐ気がついた。

それは真理先生の後援会の世話役をしている女の人で、先生の身の廻りの世話を全部している後家さんであ

る。先生と二人の間がどの位深いかは誰も気にしていないが、肉の関係がないと思っている人もないようだがあると言う人はなおないのである。そんなことはどうでもいいと皆思っている。なぜかと言えば先生はもういい齡している、誰も先生を恋する人もないし、女の人も少しも目につくような所のない、人々に嫉妬を感じさせるような人ではないからである。この女は先生の近所に住んでいて、暇があれば先生の所に来て、いろいろの世話をやっているのだ。僕はいつも不思議にかけちがって、この日はじめて逢ったのだが、噂は前から聞いていた。

「なんて書くうかね」

先生は筆をとって紙の前に字を書く姿勢をとってこう言った。

「なんでも結構です」

「なんでも結構が一番困るのだよ」

「それなら、日々是好日でよろしいわ」

すると真理先生、何にも言わずに、いきなり「日々是好日」とかいた。

精神をこめ、力を入れて書いているので見ている方が苦しくなるほどだが、できた字は力はこもっているが、どこか春の日のような温かさがある。ちょっとほしくなる字である。

「今度はしっかりしろと書いてください」

「しっかりしろとおれが怒られているようだな」

先生は楽しそうにそう言った。

「先生が叱られているのではないのですよ、私が先生に叱られているのですよ。この字を見れば、少しはしっかりする気になれると思いますから」

「おれはどうもしっかりしろなぞと言う柄ではないよ。のんきにしろぐらいが、おれにはちょうどいい」

「それならしっかりしろのあとで、のんきにしろもかいてください」

「なかなか欲が深いね」

「今日はその三つで許してあげますわ」

「僕にも一つかいてください」

先生は黙って怒ったような顔して、

「しっかりしろ」

と書いた。これは厳肅な所といくぶん劇しい感じが出ていた。

「ありがとう」

女は喜んだ。それから先生は、

「のんきにしろ」と落ちついていくぶん笑い顔して書いた。

それもなかなかよかった。

僕は黙っていた。すると先生は、

「もう一息という字でよければかきます」と言った。

僕は喜んで、「それで結構です」と言った。

先生は「もう一息」とつづけて書いて、誠と署名して静かに筆を置いた。

真理先生の本名は村野誠というのだ。

先生は自分の書いた字を見て、

「やはり人間が駄目だと字も駄目だ」

と言って、

「早くかたづけなさい」と言った。

女はあわててその字をしまった。僕もまねしてあわてて自分ももらったのをしまった。

先生は便所に立った。

「お礼はどうしたらいいのですか」

と僕は聞いた。

「そんなものはいいいのです。先生にそんなことをおっしゃったら怒られます」

と言った。

「先生はなんで生活していращやるのですか」

自分は弟子達が先生の世話をしていることは知っていたが、先生だって金はあるだろう、後援会にいくら金を寄付したいと思つてわざと聞いた。

「先生は、今の世に金なしで生活しているのは自分だけだと言つて、それを自慢にいращやるのです」

「それでも後援会には金があるのでしょ」

「それはいるのですが、今の所、金は十分あるのです」
そこに先生が帰って来た。それでその話は中絶した。

「白隠がいたら、僕もしっかりしろという字を書いても
らつていいと思ったよ。しっかりしろという字が**か**ける
のは、まあ白隠だろうね。僕はある時、白隠の**一鏃破三**
関という字を見たが、実に力強い字で、三関を破る力が
あると思ったね。一べんで難関をつきぬけて進んでゆ
く、その意力が感じられたね。あんな露骨な字は他の人
にはかけないと思ったよ」

その時、美しい少女が来て、

「お母さんお客さん」

「それでは失礼します」

女の人は帰った。

「あの子は画をやりたがっているのだ。しかし僕はそれ
よりあの子の顔を、あの石かきさんにかかして見たいと
思っているのだ」

石かきさんというのは言うまでもなく馬鹿一のこと
にちがいない。馬鹿一が女をかけばどんな画ができるか。

先生も存外人がわるいと思った。

「かけるでしょうか」

「おもしろいものができると思うね」

「でもあの人のモデルになるのはたいへんですよ」

「そうだろうね。だがちょっとかかしてみたい」

六

真理先生の生活は知れば知るほど、今時には珍しい生
活方法だ。彼は一文も金は持たない、また自分でも金も
うけをしようとは思わない。あの女の人、中沢昭子が万
事引き受けているので、その必要はないわけだが、それ
にしても一文の金も持たない強情さは人並でない、電車
にも、汽車にもほとんど乗らない。自分の家から歩いて
ゆける所以外はめったに出かけない。もっとも一年に一
度か二度位は、弟子にさそわれて海岸や山へ行くことも
あるが、さそわれなければ出かけたことはない。金のか
かる生活はしなくても彼は生きてゆけると思っている。
実際はそうではないが、彼は金の事は知ろうとしないの
だ。彼はただ自分の言いたいことを言っていればいいと
思っている。その他は全部弟子達に任せているのだ。

だから金の好きなものは彼には近づかない、精神的要
求のない人は彼と交際しても何の得る所はない。しかし
多くの人が彼の所を訪ねるのは、彼と逢って話をしてい
ると、いつのまにか心が落ちつき明るい気持になり、心
の内のわだかまりがなくなるからだ。彼は正直である。
嘘をつく必要はないのだ。また他人に媚びる必要はない
のだ。彼は彼でありさえすれば、他の人は喜ぶのだ。ま
たそういう人でないと彼の所に近づかない。

彼はそれをしあわせだと思っている。

彼の弟子が僕の所に來た。そして二人で彼のことを話したことがある。

彼の魅力はどこにあるということが話題に登^{のぼ}った。

「先生と一緒にいると自分の心が不思議に透明になり、心にかかるものがなくなります。大きな心に抱かれた気になり、生きていくのがうれしくなるから不思議です」

とその弟子は言った。

「つまり先生は私心がない、私欲がない、こだわりがない。明鏡止水という言葉がありますが、先生の心はいつも明鏡止水だと思います」

「ほんとうにそういう所がありますね」と僕も同感した。

つまり少しも他人に買いかぶられようという気がない。そして接するものに温^ぬかい好意を持って接するので、相手も安心して、自分の心を彼の心と一致させる。その二つの心の間に少しのわだかまりもない。僕なぞいろいろ欲望を持っても、真理先生に対してはその欲望の対象になるものは何にもない。先生の方でも何にも求めない。求めない心同士がいつのまにか打ち溶けてしまう。先生は利口なのか馬鹿なのかわからなくなる。ただいい気持で自分の心が自由になったように思う。世間のことはつい忘れてしまう、純な心にふれて、自分の心

もおのずと純になる、それが知らないうちに心の洗濯^{せんたく}になる。求めるものがないのだから、つい落ちついてしまふ、無心の状態になる。そこが言うに言われない魅力になるらしい。二人はその点については同意見だった。

七

しかし僕が真理先生が好きになったのはそれだけではない。もっと説明のできない魅力が先生の生活にあった。それは先生の言葉、人間的魅力にあると言っている。身体の小さい、見た所どころ言って美しくない先生が、僕をひきつけて離さないものがあつた。胸がすくと言うか、自分の心を解放してくれると言うか、ともかくむすばれた糸がするすると解けるように、先生と話していると心のどこかになった。大事件だと思ったことも、先生の所にゆくことでもない事件になってしまう。問題にするほどのことではないような気になるのだ。

ある時僕は先生に言った。

「先生は金がお嫌いなのですか」

「好きだよ。少なくとも好きだった。なんでも買いたいののが買えるから。僕が大好きな人がかいた書でも画でも金さえあれば買えるからね。だが僕は金をとる事が下手^たなのだ。金をほしがると必ず失敗する。金の得られる喜びより金をとる不快の方が僕には大きかった。そ

れでも四十位までは、金をとるためにずいぶんいやな思いもした。だが四十位の時からだんだん金がなくとも生活ができるようになった。住まいもただ、着物も誰かくれる、食物も運んでくれる。ほしいものがあれば帳面にかいておけば誰かが持ってきてくれる。後援会の人々がやってくれてることはわかってるが、誰がやっているか、後援会に金があるのかないのか、このごろは僕なんにも知らない。知らしてくるなと言ったことがあるが、その後なんにも知らない。こんな贅沢な話はないとも思うが、僕は金のために働かない人間も一人はあっていいと思っている。しかしいつまでこの生活がつづくか僕は知らない。後援会がつぶれたら、乞食の生活でも始めればいと思ってる。どんな生活をも心だけ美しくしていれば何とかなっていくと思う、渡る世間に鬼はいないと言うのはほんとうだよ。たまに鬼がいても優しい心の人がずっと多い、親切な心を自分の方から拒絶しない限り、人間はなんとか生きていくものと思ってる。外国のことは知らないが、日本では今でも、心の友達をたくさん持つていけば餓え死にはしないと思ってる。僕は自分を心の美しい人間とも思っていないが、人をすぐ愛してしまふ人間だから、人からもつい愛されてしまふ。しあわせ者だと思ってる」

「ずっと独身でいらっしたのですか」

「そうじゃない。三十五まで妻があったのです。妻は僕に愛想をつかして、逃げてしまったのです」

「なぜ愛想をつかされたのです」

「つい自分の家のことよりほかのことを考えてしまうのですね。つい妻のことを忘れてしまうのですね、夫の夜の務めをついほかのことを考えすぎて忘れてしまふ。まあ、そんなわけです。くわしい話はしてもおもしろくありませんよ。要するに僕に夫の資格が足りなかったし、妻は人生に快楽を求めすぎたと言ってもいいかも知れません」

「その方は生きていられるのですか」

「生きています、しあわせにしているようです」

「あなたもしあわせのようですね」

「しあわせすぎます。毎日ありがたいと思ってくらしています。皆に心から愛され、皆の心と僕の心は自由に、少しのこだわりなくゆききできるのですから、こんなありがたいことはありません」

「あなたのお弟子さんはいい方ばかりですね」

「涙ぐみたいほどいい人ばかりです。またいい人でなければ僕の所には来てもなんにもなりませんからね。僕は実際しあわせなくじを引きました」

真理先生はしみりとそう言った。その時三四人のお客が来た。皆顔なじみの連中だった。